

「4歳の節」と発達保障

特集

知的障害のある人の成人期における「4歳の節」

白石 恵理子

要旨

成人期において、「4歳の節」、すなわち2次元可逆操作期にある人たちは、これまで作業所等での労働集団や自治集団の中心になることも多く、「仕事になかまを合わせるのではなく、なかまに合わせて仕事をつくらう」とした作業所づくり運動において、人間らしい労働のありようを教えてくれた存在と言える。また、グループホーム等のくらしの場づくりを切り拓いてきた存在でもある。本稿では、2次元可逆操作期にある成人たちの労働や生活の姿を概観することにより、集団の意義や自律など、発達保障の課題を明らかにすることを目的とする。あわせて、「自分崩しと自分づくり」として現れる発達の弁証法的否定の過程についても検討する。

キーワード 「4歳の節」、2次元可逆操作、成人期、労働、集団

1 成人期における「4歳の節」の意義

本稿では、知的障害のある人たちの成人期の姿から、「4歳の節」、すなわち2次元可逆操作期について考える。戦後、わが国において、知的障害児に対する本格的な教育がはじまった当初、障害が重いとされた子どもたちは教育の対象としてとらえられていなかった。「4歳の節」をこえていく子どもたちも「精神薄弱」児入所施設等ですぐす場合も多かったが、書きことばの獲得は難しくても、基本的に話しことばによるコミュニケーションが可能ともあり、「教育可能」とみられていた。1950～60年代に全国に「特殊学級」が急増し、彼らの多くが、その「特殊学級」で学ぶようになっていった。そこでは、中学校を卒業するとすぐに就労し、自活することが目指された結果、作業学習や生活単元学習によって、卒業後の

準備をすることが何よりも大きな課題とされた。その後、1979年の養護学校義務制実施により、より重度の障害のある子どもたちが養護学校に就学するようになり、80～90年代には、全国で養護学校高等部の設置が進んでいった。2次元可逆操作期にある生徒たちも、養護学校高等部に進学することが増え、卒業後の受け皿として共同作業所が全国に設置されていく。そこでは、もっと障害の重い生徒たちとともに、2次元可逆操作期にある卒業生も、一般就労ではない、作業所等でのいわゆる「福祉就労」に就いた。彼らは、作業所の労働集団や自治集団にあって、自分に合った労働が保障されるなかで、「お仕事ががんばった」「もっとお給料がほしい」と労働への誇りや喜び、要求を率直に表現し、「みんなでがんばろう」と他者を励ます中心的存在でもある。グループホーム等のくらしの場においては、世話人からの支援を受けつつも、「自分のことは自分でしたい」と意志を表出し、仲間と一緒に余暇を楽しむことも多い。そうした意味では、「仕事になかまを合わせるのではなく、なかまに合わせて仕事をつくら

う」とした作業所づくり運動において、人間らしい労働のありようを教えてくれた存在であり、また、グループホーム等のくらしの場づくりを切り拓いてきた存在でもある。彼らの発達の姿を明らかにすることは、他の発達段階、もっと障害の重い人たちにとっての労働やくらしのあり方を追求するうえでも重要と考える。

2 成人期障害者の姿と2次元可逆操作期

(1) 「～しながら～する」から「～だけれども～する」へ

「4歳の節」、すなわち2次元可逆操作とは、2種類の可逆操作を一つにまとめあげることである。操作面では、両手の機能的分化と相補的使用が可能になるなど、一つの意図のもとに異なる二つの動作を自己調整する力として発揮される。たとえば、陶芸や、パンの成型などの仕事において、片手で粘土やパン生地を持ちあげながら、もう片方の手で支えて形を整えたり、片手で材料を支えながら、もう片方の手に包丁を持って切るなど、両手の使い分けが巧みになっていく。

二つのことに注意を配分することも可能になるため、自分の手元の作業に注意しつつ、他の仲間に声をかけたり、全体を見て、作業が滞っているところに気にかけてするような「～しながら～する」という姿が見られるようになっていく。

認識面でも、別々にとらえていたことを、「～だから～だ」「～したから～になった」「あとで、～する」と一つに結合させていく。こうした順接的な結合だけではなく、「～したい、けれども～だ」「～だけれども～する」「あとで～したいから、今は～する」といった逆接的な行動調整も徐々に可能になっていく。保育園や学校では、「給食を食べたら、〇〇して遊ぼう」とは言うけれども、「遊びたいから、給食を早く食べよう」にはならなかった子どもたちが、遊ぶという先の目的のために、今を制御することが可能になりはじめるのが「4歳の節」である。成人であれば、「塗ったところが乾くまでに、こっちの作業をす

る」であったり、「納品作業に行きたいから、この仕事を早くすませる」といった行動調整が可能になっていくと言えるだろう。さらには、少し長い見通しをもって、「バザーまでにたくさんつくって、たくさん売ろう」という目標が励みになったり、「夏祭りで司会をするから、セリフの練習をしておこう」と先の目標にむかって練習や努力を重ねることも可能になっていく。

(2) 目的のために方法を考える、修正する

2次元可逆操作を獲得すると、表現や行動の内容と方法を区別・分化したうえで統合させることができ、「やり方」に留意したり、工夫したりが可能になる。その前の2次元形成期では、表現したい内容（思い）と伝える方法を分けて考えることは難しい。描画であれば、自分も母親も友だちも、あるいは、バスやごはんも、みんな丸で表現する。したがって支援者は、前後の文脈や生活全体を知ったうえで本人のことばや表現の裏にある思いを想像することが必要である。「どうしたら、相手にわかりやすく伝わるかな?」「どうしたら、うまくいくかな?」と、よりよい方法を考えさせようとしても、それは難しく、もう言いたく（描きたく）ないと拒否を強めさせてしまうことにもなりかねない。2次元可逆操作期になると、「そのやり方がいいね」と評価されることが励みになったり、また、自分でも新しい「やり方」を発見し、「こっちのやり方のほうがかっこいいでしょ」などとアピールする姿もみられるようになる。

たとえば、陶芸作業で新しい技法を獲得するとそれを多用するようになっていたり、買い物に行く際に字はうまく書けなくてもメモをしようとしたり、一つひとつ運ぶのではなくまとめて運んだ方が早いと気づいて、途中からやり方を変えようとする。こうしたことは自分で発見することもあるが、多くは、日々の労働やくらしのなかで、身近な職員や世話人、家族が行なっている“技”“生活の知恵”にあこがれる気持ちが高まることが背景にあると考える。

また、目的のために修正、練習することは手ご